

Amagasaki

アマガサキ

2023 ISSUE Three

クセになる街

CHANGE the WORLD

あの日、世界が変わった。



WE
CHANGED

運命を動かしたのは、
あの日の選択と挑戦だ。

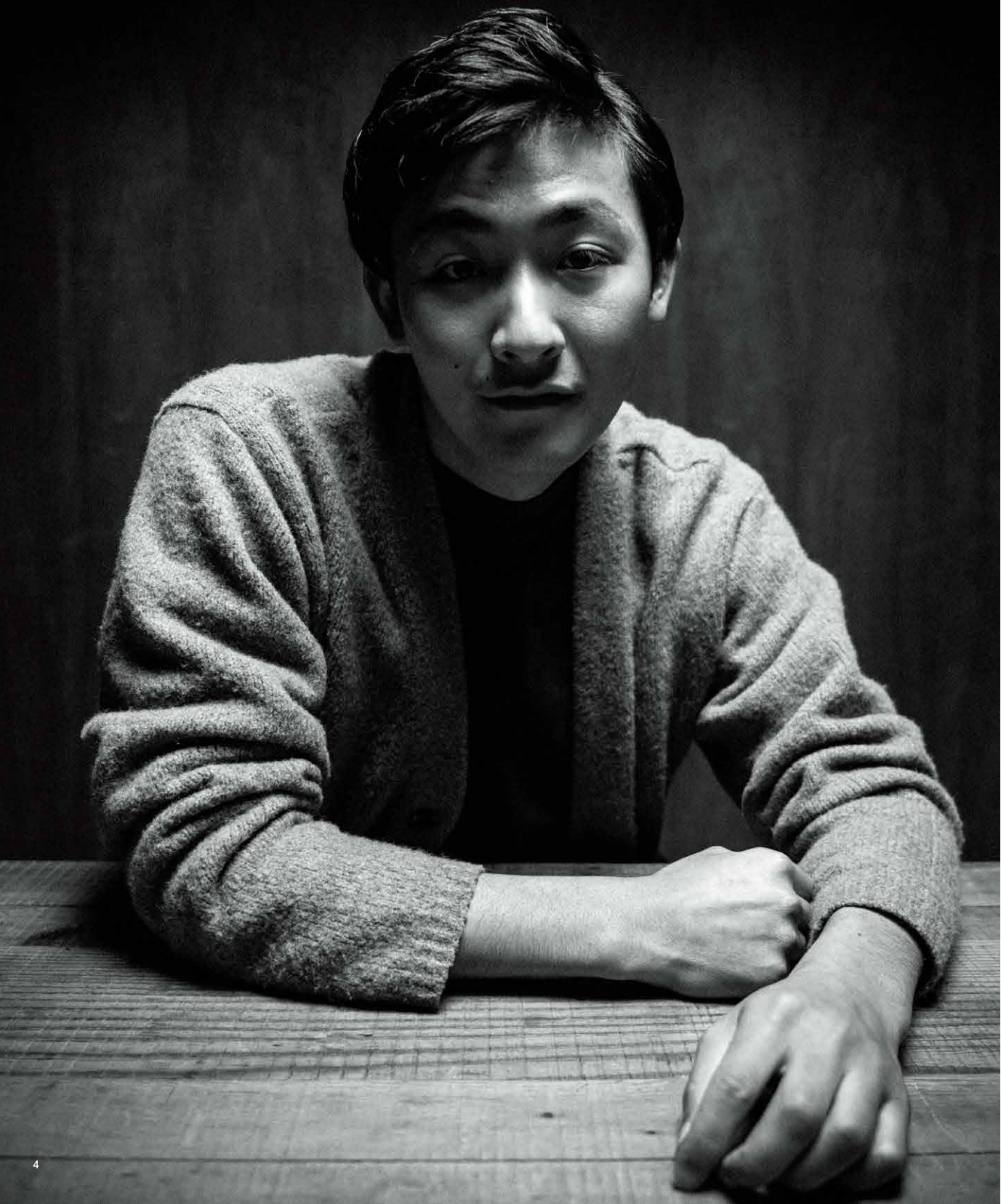
誰にでも人生のターニングポイントは訪れる。
それが偶然であれ必然であれ、
運命を動かすカギはいつだって自分の手の中に。



OUR
LIFE

ここで紹介するのは、
尼崎の街や人を通して
人生が大きく変わった人たちの、
リアルな生き様を描いた10のストーリー。
自分という殻を破り
人生の新しい扉を開けた彼らの、
世界が変わったあの瞬間…。
この街で起こった小さな奇跡を見届けてほしい。





Photographs ROB WALBERS (UN +PLUS UN)
Art direction YOSHITAKA SUYAMA(HAREBARE inc.)
Lettering MAIKO HARADA
Hair & Make MIKI NAKAIE



CHANGE of ONE

街を耕しながら、 子どもたちや地域の人々の架け橋に。

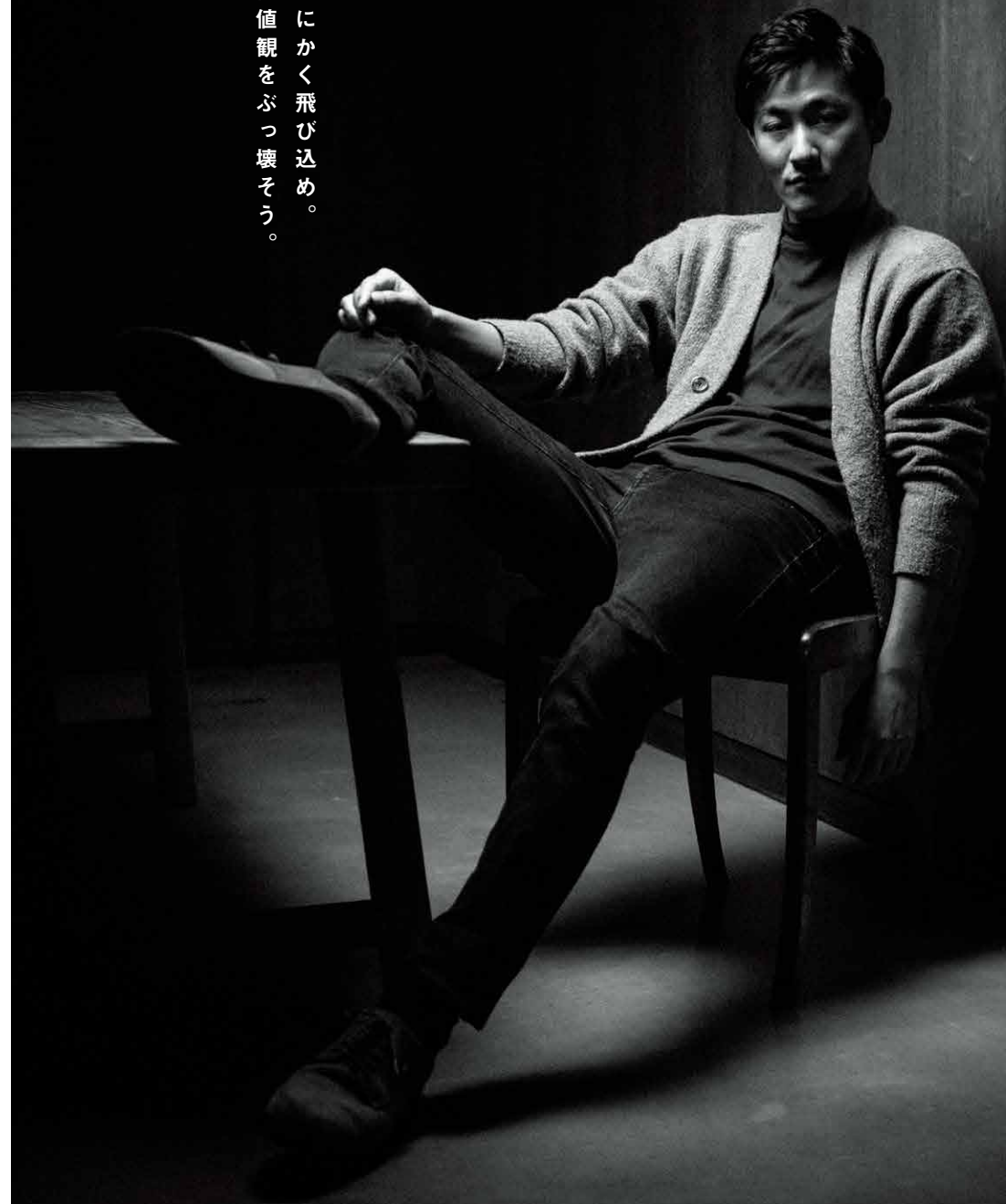
「好奇心の塊」。自らをそう表現した。大学時代には教育や児童福祉といったフィールドで活動し、カンボジアのお寺で子ども30人との共同生活を体験するなど、興味があればためらいなく飛び込んだ。いつの間にか、多くの子どもや地域と関わっている自分がいた。「物事に対して大人が考え出したアンサーはたくさんあるけど、子どもにとっては、いいなと思える大人に出会って、今日明日を生きていけることがすべて」。子どもと地域に対する、自分なりの本質を見つけられた。

この街との接点が生まれたのは一昨年。街づくりが主軸の企業へインターンで訪れたのがきっかけだ。地域の幅広い年齢層の人とイベントなどを通じて交流するうちに、尼崎の風土や人情に触れた。

苦手なことがあっても『それでええやん』と言ってくれた。苦楽を乗り越えて生きてきた味のある大人が、『失敗してもええからやってみ』とそばにいて支えてくれた。「尼崎の人たちは優しくて、今この瞬間を全力で生きている感じ。この街で新しい価値観に出会いました」

次は、自分が架け橋に。彼の新たなステージは、「NPO法人あまがさき環境オープンカレッジ」だ。市内の小学校で取り組む環境学習プログラムの開発や、環境啓発活動の企画運営も行う。驚くのが、彼以外はメンバーのほとんどがシニア世代だということ。「こないだは僕と70代の4人でファストフード店へ行きました（笑）。これまで市民活動をされてきたすごい先輩たちばかり。社会にもまれて、常に『次は何をしてやろうか?』と企んでいる。そんな生き方や考え方を尊敬しています。彼の願いは、そのエッセンスを若い世代に引き継ぎながら、地域を耕すこと。「こんな面白い大人たちがいるんだよ」と、子どもたちにもっともつと伝えていきたいですね」

とにかく飛び込め。
価値観をぶっ壊そう。





CHANGE of TWO

地球の裏側にいた、大切な人。 2人でいろんな国へ行きたいな。

夫はブラジル人、妻は日本人。仲むつまじい新婚の2人をつないだのは、尼崎のとあるシェアハウスだった。

日系3世の夫。日本文化が好きで、15歳から囲碁を始め、世界大会に出場したこともある実力者だ。その後、本格的に日本語を勉強するために3年前に来日。関西に遊びに来た際に、街の面白さに引かれたという尼崎のシェアハウスへ移り住んだ。

妻は退職してオーストラリアへ渡る予定だったが、新型コロナウイルスの影響で断念。心機一転、1人暮らしをしようとしていた。「街のイメージはあんまり良くなかったけど」と話すが、偶然父親が見つけた物件に目ぼれた。

全く関わりなかった男女の人生が尼崎で交わり、運命の歯車は一気に回り始めた。

インターナショナルな雰囲気シェアハウスでは、アジアやヨーロッパなどさまざまな地域の国の人と仲良くなれたという。そして2人は音楽や映画な

どの共通の趣味を通して、シアタールームやリビングで時間を過ごした。緩やかに生活を共にするなかで、「彼はいつもキッチンに立っては、みんなに料理を振る舞ってくれました。それでつい、胃袋を掴まれてしまいましたね（笑）」。一方で夫はシェアハウス内のジムで16キロものダイエットに成功するなど、人生が一気に色鮮やかに。距離は自然と縮まっていった。

海外赴任の経験がある親戚に囲まれた国際的な夫婦。尼崎では街や商店街で声をかけてくれるところが「海外っぽいよね」と話す。

将来はいろんな国に2人で行くのが夢。「私は医療系の仕事をしているので、その勉強がしたい」「僕はサポートしたいな」と将来を語ってくれた。

尼崎に引越して運命の人と出会った。「日々、ささいなことでもたくさん笑うようになった」「もう自分1人じゃない。体にも気をつけるようになった」。2人にとって大切なこの街で、次はどんな物語が生まれるのだろうか。







CHANGE of THREE

誰もが夢を叶えられる街へ！
まずは私が、その先頭に立ちたい。

本当にパワフルで、夢に向かって輝いている。彼女を一目見て、そんな印象を受けた。

同棲を機に引越してきた尼崎で結婚。双子を授かり、第3子を昨年出産した。誰もがハードな生活を想像するが、彼女は今、カフェの開業準備中だ。

「きっかけは、双子を授かって自分が初めてマイノリティになったことでした。母になり、犠牲が美徳のような風潮も相まって、人生の主役を降りてしまった気分になったんです。でも、これで終わっていいの？ 本当に私がしたいことは何？ そんな思いがあふれました」

自分に問いかけて出た答えは、母親がチャレンジできる環境づくりがしたいということだった。「ママはもちろん、夢を叶えたい人の背中を押せるようなカフェを目指しています。2階を貸し出して、絵を販売したい人など駆け出しの人たちの手助けができれば」

カフェのメニューにもこだわることができる素材を使っておやつと

コーヒーが主役。みんながホッとできる場所にしたい」と話す。また、彼女にはもう一つの顔がある。「看護師免許を持っているのですが、実は看護師として働かずに航空会社に勤務していました。カフェではコミュニケーションとして、地域の人たちの悩みを一緒に解決していけたら。休職した際、日々の悩みを打ち明けられる場所が私も欲しかったんですね」

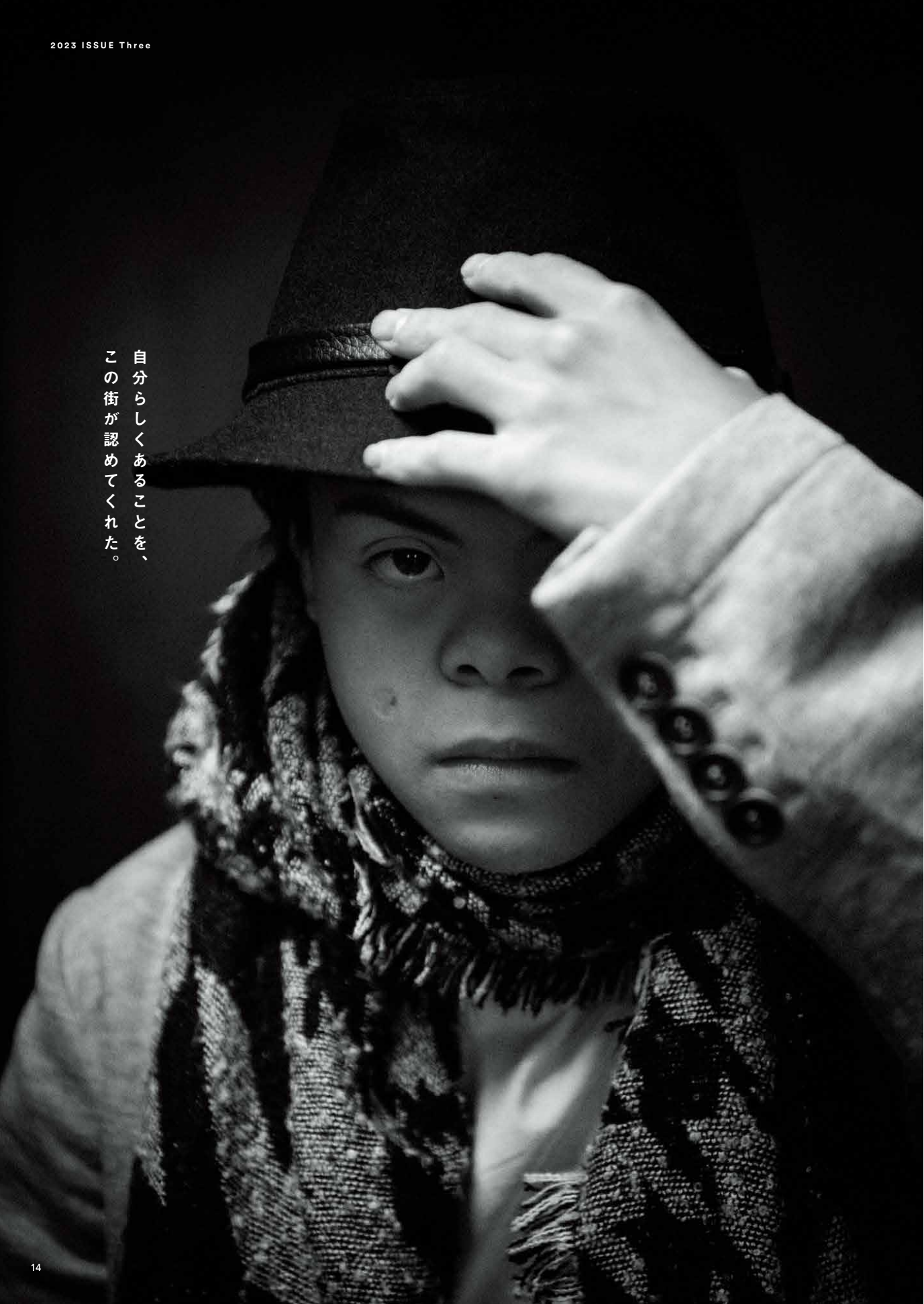
育児で一度立ち止まり、ゼロから何かを作ることや人を集めることが好きだということに気付いた。「忙しいけど、好きなことをやっているから楽しくて(笑)。私のありのままの姿を見せることで、みんなが夢を叶えやすくなったら嬉しいな」

尼崎の子育てではバスの乗り降りなどいつも誰かが支えてくれたという。「今度は私が夢を叶えて、この街に恩返しをする番」。カフェの開業予定日は、なんと3人も同じ日に生まれたという我が子らの誕生日。たっぷりの愛情を受けてこの街で育っていくはずだ。

夢を諦めなければ、
失敗してもただの道すがら、
でしょ？



自分らしくあることを、
この街が認めてくれた。



胸を張って生きてる？
私は、今が一番幸せ。





CHANGE of FIVE

街ぐるみで成長を見届けてくれる尼崎。
僕の「できる」が、増える場所。

学校でも、買い物へ行っても、誰もが名前を呼んで声をかけてくれる。小さな頃から運動会や発表会でも自分から手を振り、そこにいるだけで周りのみんなが笑顔になった。まるで太陽のような存在の彼は、16歳、ダウン症だ。

心臓の手術をきっかけに尼崎へ。小さな頃から街ぐるみで成長を見守られるように育ってきたという。「尼崎にはダウン症児の体操教室があったり療育施設があったり。遠方から来る方も多くて自然と全国に友達が増えました」「彼を認めてくれた街が尼崎です」。隣にいた母がそう語ってくれた。また、「彼には決して努力ではかなわないんですよ」とも。

少しずつ自分でもできることも増えてきたが、毎日が努力の積み重ね。中でも、もう6年目になるというウォーキングスクールでは内面も外見もみるみる変化したという。おしゃべりが苦手だけど、きちんと挨拶ができるように。さらに、自己管理ができるようになったことで

あつたとき、尼崎市が実施する学びの場「みんなの尼崎大学」のジェンダーを扱うイベントに参加。尼崎に相談場所がなかったことから「私が作ろう!」と一念発起。特定非営利活動法人 MixRainbow を立ち上げ、当事者も、応援したい人や学びたい人も集える居場所を作った。すると、市販品ではフィットしにくいパンツや下着のメーカーからも声がかかり、当事者の声を生かした商品も生まれた。

商業施設や市内外の学校での講演から全国のイベントに至るまで忙しい日々を送るなか、昨年はタイで性適合手術も受けた。「発信することで多くの人に共感してもらえました。うれしいつながりが連鎖して、新しい世界が広がりました」

一部メディアの影響から、「LGBT」当事者が笑いの対象になることにも心を痛める。「左利きの人がいるのと同じように、周りには「GBO」の人がいます。みんなと同じように暮らしたい、ただそれだけ。私たちの声が届くことを願っています」



CHANGE of FOUR

偽り続けた自分はもういない。
仲間と共に、LGBT の声を届ける。

性別に違和感を自覚したのは幼稚園の頃。小学校のランドセルは、本当は赤が良かった。「こっそり夜中に母のスカートを履いたりしていました。でも、誰にも言うてはいけません。そう決めて育ちました」。本当の心の声や性を隠して生きる。あまりにつらい偽りの状態は、彼女が大人になっても続いた。

小さな頃から自分がなかったという。高校は先生に薦められた男子校へ進学。大好きな音楽で気持ちをこまかそうとバンド部へ入ったが、マーチングで筋肉がつくことが本当は嫌だった。大学で所属したオーケストラでは、自身の心は女性なのに、女性との接し方すらわからなくなっていた。

転機となったのは40歳の頃。「独り身になり、ようやく世の中にも「LGBT」という言葉が広がってきました。もう、自分を隠さずに堂々と生きたい」

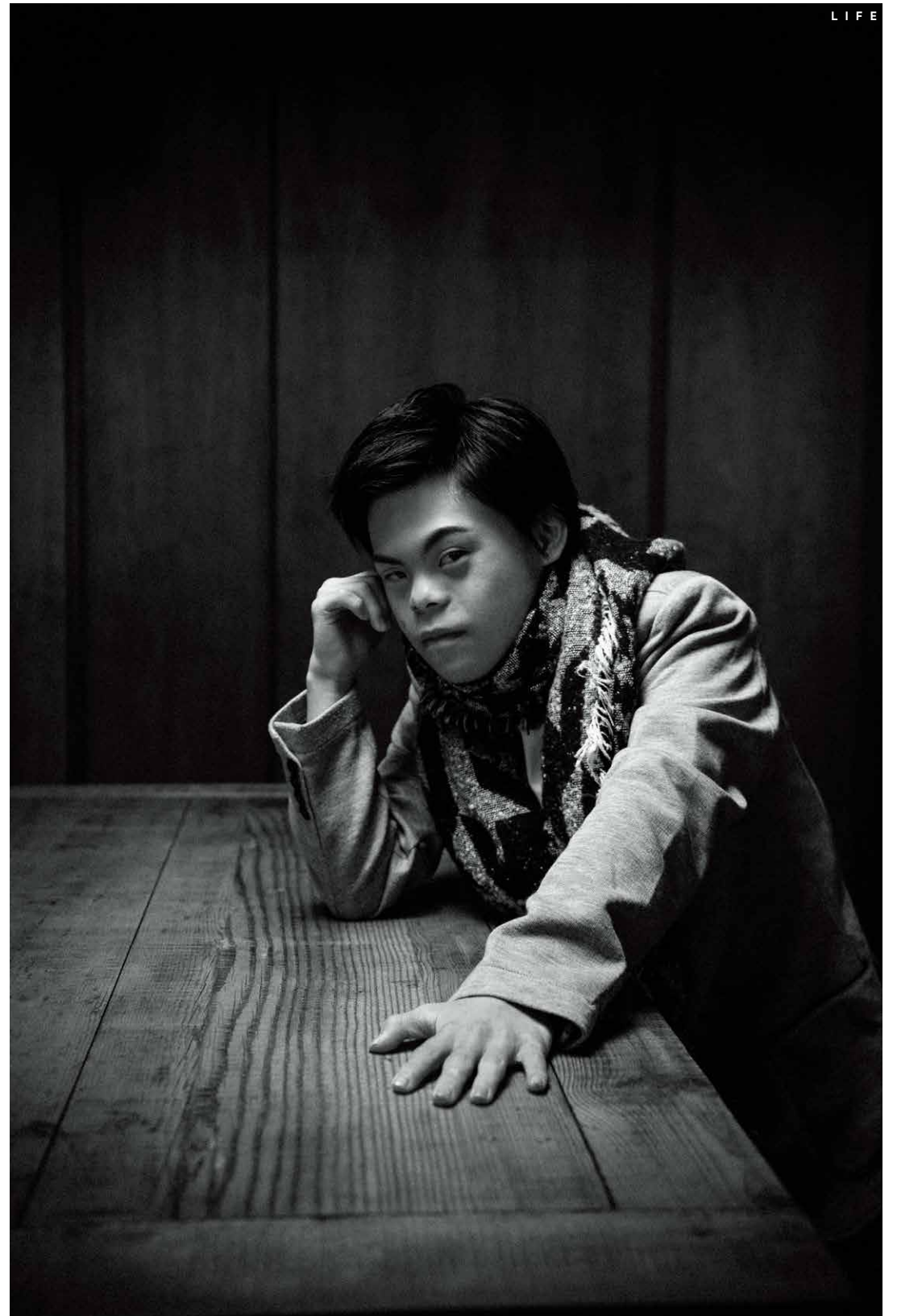
大阪のある団体との出会いを機に、やっと自分が思う性別で生きていいと思えた。失われていた自己肯定感が高まりつつ

体重も減り健康的になった。「先生にはもっと積極的にと怒られます。でも、楽しい!」と、満面の笑みを見せてくれた。

モデルとして全国各地へ赴くことも。昨年は鳥取や埼玉へ。「緊張はしません」。仲間がいるから、和気あいあいと乗り越えられるのだそうだ。

ゲームやおしゃべり、友達と一緒に遊ぶことが大好きな今どきの男の子。将来の夢は? と聞くと、「アンパンマン」と元気に返ってきた。常に頑張っているところ、勇気があるところが好きなのだという。色とりどりの花など美しいものに引かれる彼らしい、まっすぐな答えだ。今後は就職も控える。「障がいのある人への理解度はまだまだ。街の受け皿が広がって、彼らの将来の選択肢が増えてほしい」と、母は願っている。

本誌の撮影には両親も同席してくれた。ところが最後、「僕一人でもやりたい」。そう言って堂々とカメラの前へ。また一つ、彼の中の扉が開いた瞬間を目撃したような気がした。





「君にはできない」？
勝手に決めつけないでよ。



CHANGE of SIX

過酷な人生だったからこそ今がある。
私だけの使命、見つけた。

「障がいを持つ人の視点と、介護福祉士としての視点。二つの目線があるのは、きっとこの街で私ぐらい。健常者の人にはわからない景色が見えるからこそ、医療や福祉の面で私が声を上げ続けたいと」

穏やかな表情の奥に、屈することのない決意が宿る。「人生をずっと諦めていた」という彼女に強さを与えたのは、壮絶な半生と、お守りのように大切にしてきた恩師の言葉だった。

尼崎生まれ、尼崎育ち。父が家庭のもと、認知症の祖母と曾祖母の世話をする「ヤングケアラー」として子ども時代を過ごした。「家族が専門的な資格を持って寄り添わないと、崩壊してしまう…」。そんな葛藤の最中に突然訪れた、曾祖母との別れ。中学を卒業すると、迷わず介護の道に進むことを決めた。

その後ヘルパーとして働いていたが、22歳のときに事故に遭い車いす生活を余儀なくされる。さらに6年後には、100万人に1人とも言われる進行性の神経疾患「ステイツパーソン症候群」

と診断された。

普通であればくじけそうになる、そんな人生かもしれない。だが彼女は、自分にしかできないことにあえて果敢に挑戦していく。車いすでの実務者研修の受け入れ先が少ない中でも諦めず、介護福祉士の資格を見事取得。現在は車いすに乗りながら、自身の視点を生かして利用者へと向き合う。その傍ら、SNSを通じて駅やバスのバリアフリー化を訴え続け、いよいよ物事が動き始めた。

「車いすだからできないでしょ、と言われることもよくあります。でも、挑戦する前から諦めてどうするの?」。一度は人生を諦めていた彼女。人間関係に苦悩していたという中学時代、部活動の恩師が何度も口にした「諦めたら終わりやぞ」の言葉が背中を押した。

現在は通信制の大学に通い、医療福祉の知識を深めている。「尼崎を誰もが暮らしやすい街にしたいから、まだまだ発信したいことがあります。命の限り、ずっと続けていきます」

CHANGE of SEVEN

この街で、自分をアップデートできた。
もっと強く、もっとストイックに。

ベトナムに生まれた。現地の日系企業で働き、日本にやって来たのは今から約7年前のこと。技能実習生として派遣された先が、尼崎だった。初めての日本、しかも周りはコテコテの関西弁だ。「最初はみんなが何を言ってるのかわからず不安でした。『アカン』って、どういう意味？って」。その後、言語を猛特訓。5年の実習期間を経て、晴れて特定技能の在留資格を取得した。仕事も、日本での暮らしや文化も、まるでスポンジのように吸収していった。「家族みたいに優しくしてくれる会社のみなさんがいたから」。遠く離れた異国の地で頑張れた理由を、そっと教えてくれた。

ベトナムから尼崎へ。一番の変化は？との問いに、「仕事を通して自分にストイックになったこと。あとは、キレイになりました（笑）」とはにかんだ。今では後輩の実習生3人を指導する立場として、周囲に細やかに目を配る。「うちにとって、なくてはならない頼もしい存在ですよ」とは、彼女が勤める会社の社長。その働きぶりは誰もが太鼓判を押すほどだ。それだけではない。地域のための活動がしたいと、2年前には市の消防団に入団した。特定技能生による資格外活動は尼崎市では前例がなく、彼女が初のことだったという。消防団での活動は、防災訓練の手伝い、全国の女性消防団員が集う大会への参加、ベトナム語でのAEDの説明…など多岐にわたる。数少ない外国人だが、活動は精力的だ。共に活動する団員いわく、「言葉の壁があるなか、果敢に挑戦する姿は尊敬の一言ですね」。ここでも彼女は輝いていた。



#ベトナムから尼崎へ #畑で野菜育て中 #職場のムードメーカー #夢はベトナム料理店オープン

野花のように、
その場所で美しく咲くの。





僕ね、笑いの力を
本気で信じてるんです。



CHANGE of EIGHT

目指すはエンタメの“地産地消”。 何十年も公演され続ける作品へ。

職業、作家・落語作家。がんで亡くした母と自身を題材に『尼崎を舞台に書き上げた小説』『尼崎ストロベリー』は、出版から早くも3刷重版となった。「尼崎はオカンの出身地で、僕にとっては笑いの街。面白い人付き合っても温かく感じています」

大学4年生の頃には、芸人を夢見た。同時に、母の余命半年宣告を受けた。スキルス胃がんだった。生活費を稼ぐために就職し、何か自分でできることは？と調べていると目にしたのが、「笑い」ががん患者の免疫力を向上させるというものだった。「笑いが病に打ち勝つ。これや！」。お笑い好きな母に実践すると、なんとそこから10年以上も生きる奇跡が起こった。「抗がん剤の効果では？」と言われることもあるけど、僕は笑いの力を本気で信じてます」

「母が意識を失う前、『吉本に行き』と言われました。芸人になりたいことを、なぜかオカンは知ってて。32歳で僕は挑みました。エントリーシートが

志望動機には『オカンの遺言』と書きました」

作家コースへ進み、結果を残すことができたと同時に、憧れの落語家・月亭方正さんと出会った。「忘れもしません。小説新人賞の最終選考まで残ったけど賞を取れなくて落胆している僕に『自費出版してみたら？動け』と言ってくださいました。1発目の小説は、やっぱりお笑いの世界に導いてくれたオカンやと思いましたね」

この春、母の地元であり笑いの街・尼崎で小説が舞台化される。「ミュージカル『アニー』みたいに、何十代目が誕生するほど公演を重ねたい。アニーじゃなくて『アマー』的な(笑)。いつか古典落語のようにみんなが演じるネタになったら最高です」

母の口癖は「これまでの哀しい過去も、これから起こる哀しい未来も、どんな困難だって笑いに変えて、全てを笑い飛ばして生きていきなさい」。母の愛と笑いへの情熱は、尼崎の街ですっと生き続けている。



CHANGE of NINE

目には見えない子どもの生きづらさを、
尼崎の街全体で救っていききたい。

思春期の頃、日常にうつうつとしたしんどさを抱えていた。でも、誰にも言えない。悟られたくない…。彼の心の拠り所は、学校の近くにあった地域の児童館のような場所だった。ここなら信頼できる大人がいる。ここなら自分らしくいられる。心のモヤモヤが、少し晴れた気がした。「地元の尼崎には生きづらさを抱く子どもが多いと感じています。助けてと言えない子たちは、昔の僕のように普段はどこにもいる普通の子どもにも見える。だからこそ、専門機関の支援になかなかつながらないんです」。自身の経験から、学校と家庭以外に安心できる場所があることの大切さを強く実感していた。「今度は僕が子どもたちの居場所になりたい」。10代のための相談窓口を設ける一般社団法人 anGrab に所属し、昨年オープンしたのが中高生のためのかくれ家「YOKA (ヨカ)」だ。

団地の一室を開放した YOKA。立ち上げ時には市の相談会に参加したり、保護者との関係も大切にしながら、団地敷地内でお祭りを開催するなど地域との信頼関係づくりにも気を配った。SNS などを通じてここにたどり着いた子どもたちの背景はさまざま。学校には行けないけれどオープンと同時に来てくれる子や、家庭や学校で聞き役に徹するあまり、「自分の話を聞いてもらえない」と人知れずストレスを抱える子もいる。

必要があれば保健師や公認心理師にもつなぐ。「自分が普通じゃないんだと思ってほしくないんです。あくまで自然に、いつの間にかサポートされていた」という状態に導くのが理想ですね。支援されているという感覚は排除したい」。とことん子どもの気持ちに寄り添い、少しでも楽に生きられる方法を一緒に考える。「つらさが積み重なって壊れてしまう前に、学校や塾、習い事。その合間に、余暇(YOKA)を挟んでほしいんです」。

大きな目標は、各校区内に温かな居場所を設置して、救われる子どもを増やすこと。そのための仲間づくりにも、全力で奔走していく。



WE
CHANGED
OUR
LIFE

つらくて苦しい。
そんな子ども達に、
余暇を挟んで欲しい。

CHANGE of TEN

初めての双子育児に悪戦苦闘。
孤立を救ってくれたのは、この街。

この世に生を受けること自体が奇跡だ。それが双子ならば喜びも2倍、大変さも同様だ。多胎育児における人知れぬ苦悩が、笑顔に変わった。そんなエピソードが、実はこの街にはあふれている。

「夫の転勤の都合で埼玉に2年ほど住んでいましたが、関西に戻ったタイミングで双子の妊娠が判明しました。夫婦共に尼崎には何の縁もなかったが、互いの職場のある大阪へのアクセスの良さや買物のしやすさ、下町ならではの物価の安さに引かれて尼崎へ引っ越すことに。こうして選んだ新拠点は、なんと偶然にも双子の交流会が盛んな街だった。

初めての育児、初めての双子。「2人ともミルクも全然飲んでもくれないし離乳食も口にしてくれないで、悩んでいました」。そんな時、近所で開催されていた双子の育児相談会へ。「そんなに心配しなくても大丈夫！顔色もいいよ」と職員に声をかけられた。「食べなくても、今こうして元気に生きていたら何と

かなる！ようやくそう思えるようになって、フツと肩の力が抜けた瞬間でした」と当時を笑顔で振り返った。

双子の子育ては、当事者にはかわからないことが多いという。「外出しても荷物は2倍。こちらが一人なら、常に1対2の状態ですから大変です。特に子どもが小さいと付きっきりで、どうしても孤立してしまいがちでした」。そんなときに、同じ境遇にあるママ友と情報を共有できる多胎児親子のためのコミュニティがあったことで、本当に救われたそうです。

商店街を歩けば、おじいちゃんやおばあちゃんが声をかけてくれる。「あったかい街。古き良き下町らしさと今っぽさがあるって、子育てもしやすい」と、すっかりこの街がお気に入りだ。「私にとって、双子の出産、そして尼崎という街に出会ったことが人生のターニングポイント。この経験を生かして、多胎育児をするパパやママが気軽に集まれる居場所をいつか作ってみたいな」



尼崎との出会いは、私にとっては運命かも。







Photographer
ROB WALBERS

2010年ベルギーより来日。大阪で活動の後、現在は東京に拠点を移し、ファッション、ライヴ、ポートレイトの分野で幅広く活動を続けユニークな世界観で活動中。国内外さまざまなアーティストやミュージシャンらがその世界観に魅了され支持を集める。今、世界が注目するフォトグラファー。



Location

旧立花南生涯学習プラザ

長年にわたり市民の活動を支え、見守り続けた「立花地区会館」。晩年は「立花南生涯学習プラザ」へと改称するも、変わらずに地域住民に愛された場所である。新施設への移転を機に取り壊されることとなった現在、先人たちの息吹を感じるノスタルジックな空間で、これからの未来をアクティブに自分らしく生きる10組を、ありのまま撮影した。



We're on our way to
what we believe in

扉の向こうにはどんな景色が広がっているのか？
それは見ればわかるはず、
ここに登場したみんなの表情を。

さあ、次はあなたが扉をノックする番だ。

TAKE FREE

Amagasaki

クセになる街

あまらしさ続々配信中。



amagasaki_style

#あまらしさ

編集・発行
尼崎市広報課
2023年3月発行

